

研 究

2歳の母子相互応答性と3歳の情動調整との関連

金丸 智 美

〔論文要旨〕

母子相互応答性と子どもの情動調整発達との関連を検討するため、2歳時と3歳時で同一の子どもと母親31組を対象に、母子葛藤場面およびその前後の葛藤外場面という3場面で実験的観察を行った。コミュニケーション相互性と快情動共有性という2つの側面から捉えた母子相互応答性は、2歳時には葛藤前よりも葛藤後に低下したが、3歳時には場面間で変化しないことから、3歳時の葛藤場面での情動調整の自律性が示された。さらに2歳時の葛藤後場面での母子相互応答性の高さと3歳時の葛藤場面での自律的な情動調整行動との関連を明らかにし、葛藤後場面で親子関係性を柔軟に回復することが子どもの自律的な情動調整発達につながることを示唆した。

Key words：情動調整，母子相互応答性，快情動共有性，2歳，3歳

I. 問題と目的

自己の情動状態をモニターし、適度な強さや長さに調整するという情動調整¹⁾は、人が精神的に安定し、他者と成熟した関係を結びながら生きるうえで重要な心の機能として、精神保健や教育など多くの分野で認識されている。

Kopp²⁾は乳幼児期の情動調整発達について、子どもの内的要因である運動、表象、言語などの能力の向上に伴い、2歳代までと比べ3歳代以降には、周囲の期待に沿うように自分の要求や情動を柔軟に調整することが可能になるとし、自律的な情動調整への道筋を記述している。

一方Sroufe³⁾は、子どもが内的緊張や不快情動を泣きやぐずりで表出し親がなだめるという、発達初期に親子二者の間で繰り返される相互の情動調整のあり方が、後の自律的な調整の原型となるとし、親子の関係性の中で情動調整が発達することを強調している。情動調整の発達にはKopp²⁾が述べるように、子どもの内

的要因の発達に伴いその様相は変化するが、養育者の関わりをはじめとする外的要因との相互作用も考慮に入れ、親子の関係性において情動調整の発達を捉える視点が必要である。

子どもの社会・情動発達に肯定的な影響を与えるとされる親子の関係性として相互応答性が挙げられる。例えばKochanska⁴⁾によれば、この相互応答性は親子相互のコミュニケーションが調和的で、生活上のルーチンなどで親子が協力的で、快情動を共有するなど複数の側面を含み、親子間の相互応答性が高いことは、子どもが養育者の要求に心から従うという初期の道徳性形成に関連があるとされる。情動調整発達との関連については、親子間の相互応答性の中でも言語的・非言語的なコミュニケーションが親子間で長く続くことによって、効果的な情動調整が可能になるであろう。Raver⁵⁾は、母親からの働きかけに対する子どもからの応答に、母親が応答し返さないという母子間の相互的でないやり取りと、子どもの自己慰撫という消極的な情動調整行動の多さとの関連があることを明らかに

している。

また、子どもの不快さを親子相互のやり取りによって調整することで快情動へ変えていくことが、後の自律的な調整につながる³⁾のであれば、発達初期における母子間での快情動共有性の高さは子どもの自律的で適応的な情動調整を育てる土台となると考えられる。

現実には、親子の関係は行動や情動が一致した調和的なやり取りだけではなく葛藤や言い争いが頻繁に生じる。特に2歳から3歳にかけては子どもの自己意識の高まりによって、養育者が伝える社会的規範などと子ども側の欲求や感情の齟齬が増し、子どもが不快情動を表出する機会が多くなる⁶⁾。情動調整における情動には、調整される対象としての情動と同時に、他者との関係を調整する働きもある⁷⁾ため、親子の相互関係の崩れを柔軟に元に戻すことができることは適応的な情動調整発達のうえで重要である⁸⁾。

また、葛藤場面での関係の崩れによる不快情動の高まりを適度に調整し、その後の場面へ持ち越さないことも適応的な調整と言えるであろう。乳児については、スティルフェイス場面において母親からの情動的応答への期待が崩れることによる不快情動が、場面後にも影響を及ぼすという「持ち越し効果」が明らかにされている⁹⁾。しかし3歳代には子どもの情動調整は自律的になるため、親子間の葛藤の後でも「持ち越し効果」はなく、親子間の相互応答性を葛藤前の状態と同様に維持すると予想される。

本研究では、2歳から3歳への情動調整の発達と、親子間の相互応答性との関連性に焦点を当てる。ここでの養育者は、乳幼児期の情動調整発達において特に重要な存在として母親とする。①2歳時と3歳時で同一の子どもとその母親を対象に母子葛藤場面、およびその前と後の葛藤外場面（遊び場面）という3場面から構成される状況での実験的観察を行い、葛藤場面を挟んだ前と後の場面間で相互応答性が年齢に伴いどのように変化するかを分析する。本研究では母子相互応答性をコミュニケーション相互応答性と快情動共有性という2つの側面から捉える。②2歳時の母子相互応答性の中の快情動共有性が高い状態の母子遊びを記述的に分析することで、実際の母子のやり取りのどのような側面から快情動共有性が生じるのかを明らかにする。ここでは葛藤前場面よりも葛藤後場面の方が、情動調整発達により関連があるとの想定から、葛藤後場面の母子のやり取り

を対象とする。③2歳時の葛藤外場面での母子相互応答性と3歳時の葛藤場面での情動調整行動との関連を分析することで、自律的な情動調整発達に関連する母子関係性の様相を明らかにする。

以上より、次の仮説を設定する。

仮説1：3歳時の自律的な情動調整により、3歳時では葛藤前後で母子相互応答性には変化がないであろう。一方2歳時では情動調整がまだ自律的でないため、葛藤後に母子相互応答性は低下するであろう。

仮説2：2歳時の葛藤外場面での母子相互応答性の高さと、3歳時の葛藤場面での子どもの自律的な情動調整行動の多さとに正の関連があるであろう。

II. 方 法

1. 調査時期

2歳時調査：2000年7～9月、3歳時調査：2001年11月～2002年3月。

2. 調査協力者

2歳時調査への協力者41組は、著者の複数の知人の紹介によって集めた。本研究では、その中で3歳時にも調査協力の連絡および了解が得られた母子31組（男児14名、女児17名）を分析対象とした。2歳時調査の際に実施した、運動および言語発達の状態に関する3項目の質問への回答と観察、および3歳時調査での観察によって、全員発達の遅れがないことを確認した。

2歳時調査の基本属性：子どもの平均月齢は26.4か月（Range24～31か月）であり、全員がきょうだいのいない第1子であった（母親が妊娠中は0名）。家庭外で保育を受けている子どもは8名であり、祖父母など両親以外の大人とも同居している子どもは4名であった。母親の平均年齢は32.5歳（Range26～41歳）であった。

3歳時調査の基本属性：子どもの平均月齢は、43.7か月（Range41～47か月）であり、きょうだいの有無については、一人っ子の第1子26名（その中で母親が妊娠中は4名）、年下の同胞あり5名であった。家庭外で保育を受けている子どもは12名であり、祖父母など両親以外の大人とも同居している子どもは3名であった。母親の平均年齢は34.6歳（Range29～43歳）であった。

3. 観察場面

観察者1名（著者）が協力者宅を訪問し、約15分間の観察場面を録画した。3歳時には本研究の分析対象となる場面後に別の研究目的で設定した場面が続く点と玩具の一部の種類以外では、2歳時、3歳時とも観察手順は同様である。観察者が持参した玩具で母子での自由遊び（母子葛藤前場面：7分間）後、母親が「時間になったから片付けるね」と子どもに告げ、玩具が入っていたバッグまたは箱の中に片づけた後、母親は子どもの相手をする（母子葛藤場面：3分間）。その後母親が再度玩具を出し、玩具を使い母子で自由遊びを行う（母子葛藤後場面：5分間）。

4. 観察実施までの手続きおよび倫理的配慮

調査協力の了解が得られた母親へ、調査の主旨と手順についての説明を書面で郵送した。その中で、観察場面では子どもの泣きなどの不快情動が生じることが想定され、非常に強い不快情動が生じた際には観察を中断すること、子どもが楽しい気持ちで遊びを終えることができるように配慮することを説明した。さらに、観察当日にも同様の説明を行い母親に手続きの確認をしたうえで合意を得た。観察者である著者の判断によって、母子葛藤場面での観察を中断したのは2歳時に7名、3歳時に3名であった。これら全ての子どもは、葛藤後場面で玩具を出すことによって情動が安定したためその後の観察を続けた。

5. 観察に使用した用具

2歳時：玩具4種（小型のぬいぐるみ2体、ままごとセット、音の出る電話機、マグネットで連結可能な車3台セット）と、これらを収納するファスナー付き手提げバッグを用いた。

3歳時：玩具3種（布製のドールハウスおよび付属の農夫や動物数種類、ままごとセット、マグネットで連結可能な車3台セット）と、これらを収納する両側に留め具の付いた半透明のプラスチック製箱を用いた。

6. 分析方法

1) 葛藤外場面での母子相互応答性

(1) コミュニケーション相互性

言語的、非言語的なコミュニケーションに関して、three-turn-sequence（母親が働きかけ、子どもが応答し、さらに母親が応答する、あるいはその逆方向）

以上が成立するものを「相互的」、two-turn（母親が働きかけ、子どもが応答する、またはその逆方向）あるいは、one-turn（母親が働きかけ、子どもが応答しない、またはその逆方向）のものを「非相互的」、コミュニケーションが全く存在しないものを「なし」とし、3つのカテゴリーを設定した。子どもについては、言語発達状態が影響しないよう、母親に玩具を渡す、玩具を見せる、母親の言葉に行動で応じる、母親を見る、笑いかけるといった非言語的な応答もturnに含めた。

母子葛藤前場面について、2歳時、3歳時それぞれにおいて、葛藤場面の開始時点から遡った4分間を分析対象とし15秒間を1単位とする16単位に分割した。各単位で観察された母子間の言語的、非言語的なコミュニケーションについて上記3種類のカテゴリーから1つ選択し、そのカテゴリーに1点を与え、各カテゴリーの評定値の合計を算出し生起量とした。母子葛藤後場面について、2歳時、3歳時それぞれにおいて、葛藤場面終了時点から1分後を起点とした4分間を分析対象とし15秒間を1単位とする16単位に分割し、葛藤前場面と同様の方法で上記3種類のカテゴリーの生起量を算出した。ランダムに選んだ調査協力者の20%に相当する6組を対象に、2歳時、3歳時、母子葛藤前場面、葛藤後場面を組み合わせた計4場面について、著者以外の心理学の研究者1名が独立に評定をしたところ、一致率は $\kappa = .86$ であり信頼性があることが示された。

(2) 母子快情動共有性

2歳時、3歳時それぞれにおいて、上記のコミュニケーション相互性と同じ対象区間の4分間を分析対象とし1分間を1単位とする4単位に分割し、各単位での母子間での快情動の共有性をClarkら¹⁰⁾の「親子間での快情動共有度尺度」を参考に5段階で評定した（表1）。

表1 快情動共有性尺度評定基準

評定値	内容
5	声を出して笑い合うなど、明らかな快情動の共有が一定時間ある
4	声のトーンや、体の動きに躍動感があるなど、かなり明らかな快情動の共有がある
3	通常の声のトーンであり、全般的に穏やかな快情動の共有がある
2	快情動の共有が弱く、それぞれの快情動表出の頻度もごくわずかである
1	快情動の共有がなく、それぞれの快情動表出が全くない

表2 3歳時 情動調整行動カテゴリーと行動カテゴリー生起数割合の平均値

(n=31)

分類	カテゴリー	内容	3歳時平均値 (標準偏差)
対象物へ焦点化した行動	対象物への執着 (受け身的)	玩具や箱に触ることなく、泣く、ぐずる	0.00 (0.00)
	対象物への執着 (積極的)	玩具や箱に働きかける	3.34 (0.09)
	対象物への執着 (言葉随伴的)	言葉で片づけることの拒否やまだ遊びたいことの要求をする	8.15 (0.16)
	静かな執着	母親の片づけや、玩具や箱を黙って眺める	6.46 (0.77)
慰撫行動	母親への行動 (慰撫要求)	慰撫を求める行動や発話	6.18 (0.10)
	自己慰撫	自分の体や衣服の一部に触る	2.46 (0.06)
注意を他にそらす行動	気紛らわし	他の物を指さす、周囲を歩き回る、体の動きを止めて何かを見る	23.62 (0.20)
	他の活動 (消極的)	母親の働きかけ、または自分で始めた活動を行うが乗り気ではない	4.10 (0.74)
	他の活動 (積極的)	他の活動に楽しそうに熱中して関わる	13.80 (0.21)
	玩具への言及	前の場面で遊んだ玩具や内容について話す	3.70 (0.10)
認知的方略	質問	片づける理由を質問する	3.60 (0.06)
	妥協	片づけることについて、時間になるまで我慢するなどの妥協をする	2.70 (0.47)
	状況の再定義	状況や自己の行動を定義し直す	5.06 (0.84)
	母親への行動 (攻撃的)	たたく、噛むなどの攻撃的な行動	3.23 (0.93)
その他	片づけ	玩具を片づける、または片づけている母親に玩具を渡す	11.08 (0.11)
	母親の提案拒否	母親の遊びの提案を拒否する	1.64 (0.05)
	その他	その他 (評定不可能な場合も含む)	0.53 (0.02)

数値は、各対象者の総単位数に占める、各情動調整行動カテゴリーの生起数の割合の平均値 (%)。

ランダムに選んだ調査協力者の20%に相当する6組を対象に、2歳時、3歳時、母子葛藤前場面、葛藤後場面を組み合わせた計4場面について、著者以外の心理学の研究者1名が独立に評定をしたところ、一致率は $\kappa = .81$ であり信頼性があることが示された。

2) 2歳時の快情動共有性の記述的分析

2歳時の快情動共有性の特徴を記述的に分析するために、母子葛藤後場面での快情動共有性得点が平均値よりも1SD以上の母子を対象とし、それぞれの母子のやり取りについて快情動共有性を高くしている遊びのエピソードの記述を行った。

3) 3歳時の子どもの情動調整行動の評定

3歳時の子どもの情動調整行動を、金丸¹¹⁾の情動調整行動カテゴリーをもとに一部再評定を行った。再評定を行ったのは、金丸¹¹⁾で使用した情動調整行動カテゴリーの中の「その他」カテゴリーに、「玩具を片づける」と「母親の提案を拒否」を追加した点である(表2)。母子葛藤場面の約3分間について10秒間を1単位として区切り、そこで最も主要な行動カテゴリー1つを評定した。観察を中断するなど、子ども

によって母子葛藤場面の時間の長さが異なり総単位数に幅がある(Range: 9~19)ため、各子どもにおける総単位数に占める各行動カテゴリーの生起数の割合(%)を算出した。さらに、各行動カテゴリーについて生起数の割合の平均値(%)を算出した(表2)。

2) 以外での統計的分析にはSPSS Statistics Ver.24を使用した。

Ⅲ. 結 果

1. 年齢による葛藤場面前後での母子相互応答性の変化

2歳時、3歳時の葛藤場面前後でのコミュニケーション相互性および快情動共有性の記述的統計量は表3のとおりである。

年齢および葛藤場面前後での、コミュニケーション相互性の3つのカテゴリーと母子快情動共有性の変化を分析するため、それぞれを従属変数とした、対応のある2要因(年齢要因: 2歳時と3歳時の2水準、場面要因: 葛藤前場面と葛藤後場面の2水準)の分散分析を行った。

その結果、コミュニケーション相互性の「相互的」

表3 母子相互応答性記述統計量

		2歳時 (n=31)		3歳時 (n=31)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
葛藤前場面	コミュニケーション「相互的」	10.74	3.64	12.23	3.62
	コミュニケーション「非相互的」	4.16	2.79	2.81	2.89
	コミュニケーション「なし」	1.10	2.12	1.00	1.84
	快情動共有性	2.30	.60	2.70	.83
葛藤後場面	コミュニケーション「相互的」	8.87	3.15	11.74	3.96
	コミュニケーション「非相互的」	5.81	2.51	2.71	2.41
	コミュニケーション「なし」	1.32	1.76	1.55	2.67
	快情動共有性	1.88	.50	2.63	.67

では、年齢 ($F(1,30)=10.19, p<.01$) と場面 ($F(1,30)=14.05, p<.01$) の主効果が有意であり、年齢と場面の交互作用は有意傾向 ($F(1,30)=3.05, p<.10$) であった。場面の単純主効果を分析した結果、2歳時では葛藤前場面の方が葛藤後場面よりも有意に ($F(1,30)=11.65, p<.01$) 多く、3歳時では有意ではなかった ($F(1,30)=3.63, n.s.$)。

コミュニケーション相互性の「非相互的」では、年齢 ($F(1,30)=17.29, p<.001$) と場面 ($F(1,30)=7.11, p<.05$) の主効果と、交互作用が有意 ($F(1,30)=5.81, p<.05$) であった。場面の単純主効果を分析した結果、2歳時では葛藤後場面の方が葛藤前場面よりも有意に ($F(1,30)=10.89, p<.01$) 多く、3歳時では有意ではなかった ($F(1,30)=.05, n.s.$)。

コミュニケーション相互性の「なし」では、年齢 ($F(1,30)=.03, n.s.$) と場面 ($F(1,30)=2.13, n.s.$) の主効果および交互作用 ($F(1,30)=.41, n.s.$) は全て有意な差異はなかった。

次に母子快情動共有性については、年齢 ($F(1,30)=20.38, p<.001$) と場面 ($F(1,30)=18.24, p<.001$) の主効果と、交互作用が有意 ($F(1,30)=4.70, p<.05$) であった。場面の単純主効果を分析した結果、2歳時では葛藤前場面の方が葛藤後場面よりも有意に ($F(1,30)=20.97, p<.001$) 高く、3歳時では有意ではなかった ($F(1,30)=.61, n.s.$)。

2. 2歳時の快情動共有性の記述的分析結果

母子葛藤後場面での快情動共有性得点が平均よりも1SD以上(得点2.40)の母子5組(男児1組, 女児4組)を対象とし、それぞれの母子のやり取りについて快情動共有性を高くしている遊びのエピソードとそこから抽出される特徴を表4にまとめた。

Aでは、マジックテープで付いてある野菜を手で離したり、プラスチック製のニンジンを入れたりという、大人の基準とずれた子どもの行動に対して、母親の中に生じた、止めさせることと受け入れることの揺れが母親の笑いとなって表現されていた。この母親の笑いによって、子どもは自分の行動を母親が受け止めてくれたと感じ、さらには母親の笑いが伝染したことで微笑みの表情となった。

Bについては、ぬいぐるみを車に乗せるという母親からの遊びの展開によって子どもの快情動が高まっていた。母親が、言葉では十分に表現できない子どもの要求を読み取り、さらに遊びを展開していくことで子どもの楽しさは増していた。

Cでは、子どもから母親に皿や食べ物を渡すというように、行動としては子どもから遊びを始めているが、食べることの遊びとしての展開は母親から始めていた。母子で同じ対象物を操作し、同じ動作をし、ふりによってイメージを共有することでの喜びを子どもは表現していた。

DとEは、母親が情動的に関わることで子どもはやり遂げたことの満足感という快情動を味わっていた。Dでは、マグネットで車を連結させることが上手いかわからない子どもの行動を、母親は「イヤイヤしている」と擬人化すると同時に笑いも表出することで、できないことを遊びのように意味づけていた。そのため子どもはかなりの時間、車をつなげることに集中し、連結させた車を走らせた満足感を母親と共有していた。Eの母親は、子どもがニンジンを切れなかった時にはトーンを落とした声で残念さを表現し、切れた時には驚きや喜びという情動を表情と声のトーンで表現することで子どもの情動に合わせていた。子どもはそのような母親の情動的支えによって、切れたことの喜

表4 2歳時葛藤後場面における母子快情動共有エピソード

対象組	遊びのエピソード	快情動共有生起の契機
A (24か月:男児)	子がマジックテープで付いた状態のトマトを包丁で切ろうとしているが、なかなか切れないので手で割ろうとするのを見て、母が笑いながら「あれ?」と言うと、子も「へへ・・・」と笑う。母が「ニンジンもあるよ」とまな板に乗せると、子は包丁で切ろうとするがすぐに手で割る。それを見て母が笑い子も微笑む。子がそのニンジンをお口に入れると母は笑いながら「ダメダメ、食べちゃった」と言う。子が「おいしい」と言うと言母は「おいしいの」と言い、子は「うん」と微笑む。	母親の快情動の表出による意味の伝達と快情動の伝染
B (24か月:女児)	母がぬいぐるみを持ってぬいぐるみの声のトーンで「ちょっとお散歩行ってくるね」と言い、車に乗せて走らせる。自分の方に近づくと子は「おかえりー!」と大きな声で言う。子が「乗る?」と、もう一体のぬいぐるみに言うと母は「私も乗りたい」とそのぬいぐるみを車に乗せて走らせる。子は手をたたきながら「じょうず、じょうず!」と大きな声で言う。子が「〇〇さん(ぬいぐるみの愛称)(以下言葉不明瞭だが発話)」とぬいぐるみを母に差し出すと母は「〇〇さんも乗りたいな」と再び車に乗せる。母はもう一体のぬいぐるみも別の車に乗せ、2体それぞれを車に乗せて同時に走らせる。子は「いっしょに!」と大きな声で言う。	母親による遊びの発展の中でのストーリーの共有
C (24か月:女児)	子が母に皿とフォークを渡す。子が「(いただきま)す」と言いながら頭を下げると、母は笑いながら「いただきまーす。何食べる?」と尋ねる。子が「カレーラ(イス)」と言い、ハンバーグを母の皿に置き、自分の皿には魚を置く。母「いただきまーす」と言うと子は頭を下げる。母は「パクパク」と声を出しながらフォークで食べるふりをし、子も食べるふりをしながら母を見る。母が「おいしいね」と言うと子は小声で「うん」と言いながら食べる真似を続ける。母の「ごちそうさまでした」に合わせて子も「(ごちそうさまでし)た」と言いながら笑みの表情でカメラに視線を向けて頭を下げて皿を置く。	母子での行動とイメージの共有
D (27か月:女児)	子がマグネットで連結する車の2台をつなげようとするが、先頭同士を付けるのでマグネットの磁力が反発する。母は子の方に体をかがめた姿勢で「イヤイヤしてるよ、イヤイヤって」と言うが、子は何度か同じように先頭や後部同士をつなげようとしている。その間も母は「おしりとおしり、くっつかないねえ」と言う。再度母が笑いながら「イヤイヤって」と言うと言子が「イヤイヤ」と言いながら微笑んで母を見る。母の手助けで3つの車を連結させその状態で子が押し、勢いで少しの長さを走ると指さしながら子は微笑み、母は子を見て微笑む。	母親による子どもの行動へのイメージによる意味づけ
E (29か月:女児)	子は包丁で魚を切ろうとすると、「切れなかった」と言いながら両手を少し上に挙げて切れなかったことを身振りで表す。それと同時に母は微笑みの表情で子を見て「切れなかったねー」と言う。母は「じゃあニンジンさんは?」、「ニンジンさん切れるかなー」と言うと子がニンジンを切る。母が目を見開き眉を上げた表情で「あっ、切れたー」と言うと子は少し間を置いて両手をたたく。子が再びニンジンを切り、両手を上に挙げて切れたことを身振りで表現すると、母は「切れた! トンっていったね」と言う。子はその後も繰り返し何度かニンジンを切る。	母親の子どもの情動への共感

びを母親と共有し、その後も切ることを繰り返していた。

3. 3歳時の情動調整行動

3歳時の母子葛藤場面での子どもの情動調整行動については、表2に示すように生起数の割合が10%以上であったのは、「気紛らわし」、「他の活動(積極的)」という注意を他にそらす行動と、「片づけ」であった。対象物へ焦点化した行動の中では「対象物への執着(言葉随伴的)」が最も高かったのに対し、「対象物への執着(受け身的)」の生起はなかった。生起数の割合は高くはなかったが、慰撫行動や認知的方略も生起した。

4. 2歳時の母子相互応答性と3歳時の情動調整行動との関連

2歳時の母子相互応答性と3歳時の情動調整行動との関連を分析するために、スピアマンの順位相関分析を行った(表5)。その結果、2歳時の母子相互応答性との関連が多くみられたのは、3歳時の「自己慰撫」であり、母子葛藤前場面および母子葛藤後場面での「なし」と正の有意な関連($r = .45, p < .05$; $r = .39, p < .05$)、母子葛藤後場面での「相互的」と負の有意な関連($r = -.36, p < .05$)、母子葛藤後場面での「快情動共有性」と有意傾向の負の関連($r = -.32, p < .10$)があった。

3歳時の「対象物執着(言葉随伴的)」と2歳時の

表5 葛藤後場面での2歳時母子相互応答性と3歳時情動調整との相関係数

2歳時母子相互応答性 (n=31)	コミュニケーション 「相互的」	コミュニケーション 「非相互的」	コミュニケーション 「なし」	快情動共有性
3歳時情動調整行動 (n=31)				
対象物執着 (積極的)	-.23	.19	.15	-.30
対象物執着 (言葉随伴的)	-.21	.26	-.01	-.36*
静かな執着	-.33 ⁺	.35 ⁺	.11	-.17
母親への行動 (慰撫要求)	-.14	.22	-.09	.01
自己慰撫	-.36*	.26	.39*	-.32 ⁺
気紛らわし	-.07	-.02	.15	.13
他の活動 (消極的)	-.14	.18	.04	-.08
他の活動 (積極的)	.30 ⁺	-.22	-.30	.26
玩具への言及	.09	-.23	.18	.15
認知的方略 (質問)	-.15	.11	.08	-.11
認知的方略 (妥協)	.10	-.11	-.15	-.01
認知的方略 (状況の再定義)	.26	-.28	-.11	.59**
母親への行動 (攻撃的)	-.08	.10	.04	.19
片づけ	.35 ⁺	-.38*	-.01	.07

⁺p<.10, *p<.05, **p<.01

母子葛藤後場面での「快情動共有性」と有意な負の関連 ($r = -.36, p < .05$), 「認知的方略 (状況の再定義)」と2歳時の母子葛藤後場面での「快情動共有性」と有意な正の関連 ($r = .59, p < .01$)があった。3歳時の「片づけ」は2歳時の母子葛藤後場面での「非相互的」と負の有意な関連 ($r = -.38, p < .05$), 母子葛藤後場面での「相互的」と正の有意傾向の関連 ($r = .35, p < .10$)があった。

3歳時の「他の活動 (積極的)」は2歳時の母子葛藤後場面での「相互的」と有意傾向の正の関連 ($r = .30, p < .10$)が、3歳時の「静かな執着」は2歳時の母子葛藤後場面での「非相互的」と有意傾向の正の関連 ($r = .35, p < .10$), および「相互的」と有意傾向の負の関連 ($r = -.33, p < .10$)があった。

IV. 考 察

1. 年齢による葛藤場面前後での母子相互応答性の変化

葛藤前と葛藤後の母子相互応答性の変化について、2歳時ではコミュニケーション相互性の「相互的」と母子快情動共有性は葛藤後には低下し、一方コミュニケーション相互性の「非相互的」は葛藤後に増加すること、さらに3歳時にはコミュニケーション相互性の「相互的」、「非相互的」および母子快情動共有性のいずれでも変化がない結果から、仮説1が支持された。本研究の3歳時の情動調整行動の結果から、「気紛らわし」や「他の活動 (積極的)」の生起数の割合が他の行動よりも高いことが示された。また、生起数の割

合は小さいものの、言葉を使用した認知的方略によって不快情動を調整するようになることも3歳時の情動調整の特徴と言える。さらに、玩具を片づけるという行動の生起数の割合も高かったことは、母親の要求に沿うように情動と行動を調整できるという自律性を表していると考えられる。以上から、3歳時には葛藤場面であっても、子どもが不快情動を調整する積極的な行動を取ることで葛藤場面での不快情動を持ち越さずに、葛藤後場面の母子相互応答性を葛藤前と同じように維持できるようになったと言える。

2歳から3歳という年齢は、子ども自らの意志や要求が明確になるために、日常場面でも他者からの要求や社会的規範との齟齬が増え⁶⁾、それだけ情動調整の必要性が高まる。子ども同士や保育者という家族以外の関わりの世界へと入っていく年齢である3歳時に、葛藤場面で不快情動を感じながらも葛藤後に葛藤前と変わらない他者との快の情動的関係を持つことができるということは、他者との関係を広げ、そこで自己を発揮できる可能性を高めるという意味でも適応的と言えるであろう。

2. 2歳時葛藤後場面における母子間の快情動共有性の特徴

母子のやり取りの記述的分析を通して、2歳時の葛藤後場面における快情動の共有のあり方に関して明らかになったのは、5組に共通して、玩具という対象物に共に関わるうえで快情動の共有が生起するのは、子どもの行動や遊びについての意味やイメージを母子で

共有する時であり、それは母親から提供されていた点である。また、単に意味やイメージを与えるのではなく、母親が楽しさや満足感、驚きなどの情動を表現し、それを受けて子どもも同様の情動を母親に向けて表現し返すという、情動の相互のやり取りが生起していた。

3歳以降の幼児後期での子ども同士の遊びにおいては、社会的なふり遊びは、それ以外の遊びよりも多くの快情動を伴うことが先行研究で示されている¹²⁾。本研究の結果は、本格的な社会的なふり遊びが出現する前の2歳時の母子遊びにおいても、単に対象物を操作するのではなく、対象物に意味やイメージをつけることで母子間での遊びの楽しさの共有が高まっていたことを示した。それと同時に、2歳時に葛藤後場面において母子間で快情動を共有するためには、母親の情動的な関わりおよび意味やイメージの提供という積極的な関わりが必要であることも明らかになった。

3. 2歳時の母子相互応答性と3歳時の情動調整行動との関連

2歳時の2つの葛藤外場面のうち、葛藤前場面について母子相互応答性と3歳時の情動調整行動と有意な関連があったのは、コミュニケーション相互性の「なし」と3歳時の「自己慰撫」間のみであった。一方、葛藤後場面については母子相互応答性の高さと、3歳時で「自己慰撫」や「対象物執着（言葉随伴的）」というより未熟な行動の少なさや、「認知的方略」や「片づけ」という自律的な調整行動の多さとの関連があった。つまり仮説2は一部支持されたと言える。

2歳時の母子相互応答性と3歳時の情動調整行動との関連の結果の中でも特に3歳時の「自己慰撫」という情動調整行動の多さが、母子相互応答性の低さの複数と関連していた。これはRaver⁵⁾が、母子間の相互的でないやり取りと、子どもの自己慰撫との多さとの関連を示した点とほぼ一致する。本研究の中での3歳時の自己慰撫の様子を見ると、玩具を片づけた後母親が自分に話しかけるのを聞きながら口に手を入れたりする、あるいは母親の片づけを見ながら自分の足の甲を触るなど、体の大きな動きを止めた状態や発話のない状態で生起していることから、この年齢での自己慰撫は受け身的な情動調整行動と言える。母子間のコミュニケーションの相互性および快情動共有性の低さと、自己慰撫という受け身的な情動調整行動との結びつきが示されたことによって、発達初期での母子相互

応答性の低さが、他の活動を行うことや気紛らわしなどの子どもの積極的な情動調整行動の発達を難しくする可能性も示唆される。

また、3歳時の「片づけ」と葛藤後場面での「相互的」とに正の関連、および「非相互的」とに負の関連があった点や、「対象物執着（言葉随伴的）」と葛藤後場面での快情動共有性とに負の関連があった点は、Kochanskaの先行研究⁴⁾の結果と一致する。コミュニケーションが相互的であることによって、子どもは自身の働きかけに親が応えてくれることをより多く経験するため、養育者への信頼感を高め養育者の要求を喜んで受け入れやすくなるであろうし、快情動が伴うことで養育者の要求をより内面化しやすくなる。3歳という自律的な調整が可能となる段階で、養育者の要求に従うことは道徳心の芽生えであるとともに、養育者以外の他者との関係を維持していく力の土台にもなっていく。

3歳時の「認知的方略（状況の再定義）」と2歳時の葛藤後場面での快情動共有性とにかなり高い正の関連がみられたことは、以下のように解釈できるであろう。まず、「認知的方略（状況の再定義）」に分類された子どもの言葉を具体的に見ると、「じゃあ、〇〇（自分の名前）が片づける人ね」、「男は遊びたいけど、がまんする」などである。これらの言葉は、それまでの日常生活で遊びを中断させたり魅力的なものを我慢させたりするような状況で、養育者が子どもに語りかけてきたものとも考えられる。本研究の中で、快情動共有性の高い母子のやり取りの記述的分析によって、2歳時の遊び場面において快情動が共有される際には母子間で意味やイメージを共有しながら対象物に関わるという様相が示された。つまり快情動共有性の高い母親は、快情動の表出が高いだけではなく、子どもの行動や情動に意味づけを行う傾向にあるため、子どもは自分の情動や内的状態を言葉で表現するなど距離を持って捉えることが可能になると考えられる。

3歳時の情動調整行動との関連が多くみられたのは、2歳時の葛藤前場面よりも葛藤後場面での母子相互応答性であった。2つの場面を比較すると、葛藤前場面は普段の母子関係性を表すものであり、葛藤後場面は葛藤を経た後にどの程度関係性を回復させたのかを表すと言える。本調査では自律的な情動調整行動と関連があったのが、葛藤前場面ではなく葛藤後場面での母子相互応答性であったことは、親子の葛藤をどの

ように交渉，妥協しながら解決に向かって柔軟に回復するのが，適応的な情動調整につながるとの指摘⁸⁾を実証したとも言える。

V. まとめと今後の課題

本研究では3歳時には葛藤後場面でも母子相互応答性に影響を与えないだけの情動調整の自律性があることを明らかにした。また，そのような3歳時の自律的な情動調整は，2歳時において，葛藤後にも母子間での意味やイメージの共有を伴いながら快情動を共有することやコミュニケーションの相互性と関連していることを示した。近藤¹³⁾は心理学研究の中で親子関係については，子どもの不安や怖さという不快情動を養育者に近接することで低減するというアタッチメントの観点からの研究は数多くなされてきた一方で，親子が共に遊ぶ場面などにおいて快情動を共有する「コンパニオンシップ」という側面に関する研究が少ないことを指摘している。従って子どもの情動調整発達における重要な側面として，遊び場面において母子間で快情動の共有がどのように生起し，情動調整とどのような関連があるのかに焦点を当てた点は本研究の意義であろう。

2歳という親子での葛藤が多い時期でも，一緒に遊ぶ中で相互に快情動を表出し合いながらコミュニケーションを楽しむことが，子どもの後の自律的な情動調整発達に関連があると実証した結果は，乳幼児健診や発達相談などの母子臨床の場でも応用可能と考えられる。

本研究では子どもの情動調整発達に関連する要因として母子関係のみに焦点を当てたが，子どもの気質や言語発達などの内的要因や，家庭外での保育経験などの外的要因については言及をしていない点が課題である。これらの要因も情動調整の発達に密接な関連があるため，これらを統制しても本研究のような結果が得られるのかを検証する必要がある。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Thompson RA. Emotion regulation : A theme in search of definition. *Monographs of the Society for Research in Child Development* 1994 ; 59 : 25-52.
- 2) Kopp CP. Regulation of distress and negative

emotions : A developmental view. *Developmental Psychology* 1989 ; 25 : 343-354.

- 3) Sroufe LA. *Emotional development : The organization of emotional life in the early years.* Cambridge : Cambridge University Press, 1996.
- 4) Kochanska G. Mutually responsive orientation between mothers and their young children : Implications for early socialization. *Child Development* 1997 ; 66 : 236-254.
- 5) Raver CC. Relations between social contingency in mother-child interaction and 2-year-olds' social competence. *Developmental Psychology* 1996 ; 32 : 850-859.
- 6) Laible D, Panfile T, Makariev D. The quality and frequency of mother-toddler conflict : Links with attachment and temperament. *Child Development* 2008 ; 79 : 426-443.
- 7) Cole PM, Martin SE, Dennis T. Emotion regulation as a scientific construct : Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development* 2004 ; 75 : 317-333.
- 8) Biringen Z, Emde RN, Pipp-Siegel S. Dyssynchrony, conflict, and resolution : *Orthopsychiatry* 1997 ; 67 : 4-19.
- 9) Cohn J, Tronick EZ. Three-month-old infants' reaction to simulated maternal depression. *Child Development* 1983 ; 54 : 185-193.
- 10) Clark R, Musick J, Scott F, et al. The mother's project rating scales of mother-child interaction. Unpublished manuscript, University of Wisconsin Medical School, 1980.
- 11) 金丸智美, 無藤 隆. 情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達的变化. *発達心理学研究* 2006 ; 17 : 219-229.
- 12) Connolly JA, Doyle AB, Reznick E. Social pretend play and social interaction in preschoolers. *Journal of Applied Development Psychology* 1988 ; 9 : 301-313.
- 13) 近藤清美. 妊婦・胎児間, 祖父母・孫間等におけるアタッチメント関係. *発達科学ハンドブック4. 発達の基盤.* 東京 : 新曜社, 2012 : 255-283.

[Summary]

This study examined the longitudinal relations between mother-child's mutual responsiveness and child's development in emotion regulation. Observation data were collected from 31 mother-child dyads at two years and three years.

Results indicate that mother-child's mutual responsiveness in the aspects of mother-child's mutual communication and shared positive emotion was more decreased after conflict scene than before it at two years, compared with no change at three years. This suggests that there is the autonomy of emotion regulation in the conflict scene of three-year-olds.

The correlations between the high mother-child's mutual responsiveness after conflict scene of two-year-olds and the autonomous emotion regulation in conflict scene of three-year-olds indicate that flexibly restoring mother-child's relationship after conflict scene develops the child's autonomous emotion regulation.

[Key words]

emotion regulation,
mother-child mutually responsiveness,
mother-child shared positive emotion,
two-year-olds, three-year-olds